

魅力ある県立高校づくり懇話会（第4回）議事録

- 1 日 時 平成25年1月15日（火曜日）14時～16時
- 2 場 所 埼玉会館 5階5B会議室
- 3 出席者 渋谷座長、藤池副座長、小杉委員、熊谷委員、中村委員、戸ヶ崎委員、
工藤委員、山本委員、大出委員、佐藤委員
- 4 議 題
県立高校の活性化・特色化の取組について
(専門高校及び専門学科の設置状況や課題について事務局から説明)

座 長 事務局からの説明について質問はあるか。

委 員 統計で全国の数字を見ると、工業高校卒業者の就職率は非常に良いし、企業にも評価されていると認識していたが、埼玉県の工業高校の状況は違うのか。

事務局 工業高校は就職率も高く、調査は行っていないが離職率も普通高校に比べて低いと思われる。今の説明は工業高校に特化したものではなく、専門高校全体が今置かれている社会状況の変化等についての説明と御理解いただきたい。

委 員 おそらく専門高校の専門性によって違いがあるため、それを意識して議論した方がいいと思う。

座 長 事務局から非常に率直な現状の説明があったように思う。これを議論の土台とし、とは言えこれに沿うばかりでなく、色々な角度からきめの細かい議論をお願いしたい。他に質問があるか。

委 員 高校卒業時の就職率について、普通科、農業、商業、工業がそれぞれどのくらい知っておきたいので教えていただきたい。

委 員 無業者と言われる卒業時に就職も進学もしない生徒の率も併せてお願いしたい。

事務局 平成24年3月卒業生数に対する就職者の割合は普通科が9.9%、農業は42.7%、工業は59.6%、商業は40.2%である。また、無業者の割合は、普通科が5.3%、農業が10.8%、工業が2.5%、商業が4.5%といった比率になっている。

委 員 残りが専門学校なども含んだ進学等になるという理解でよいか。浪人生は無業者になるのか。

事務局 基本的にはその通りであるが、浪人生のうち予備校に行ったものは専修学校進学扱いとなる。

委 員 農業についてお尋ねしたいが、農業は、新たにやろうと思っても、法律などの関係で新規農営が難しい制度的な制約があるが、農業高校に在籍している生徒で、家業として農業をしているか、または関連した仕事に従事している割合

はどれくらいか。

事務局 農業関係学科を設置している学校のうち、単独農業高校2校の数字であるが、平成24年度在籍の生徒では2校とも専業農家、兼業農家を合わせ1割未満となっている。

委員 農業高校を卒業して家業を継ぐ生徒はどのくらいいるのか。

事務局 平成24年3月卒業者が900名強いるが、うち卒業して即農業に就いた生徒は5名である。他に、将来農業に就くことを前提に、農業大学校や農業系の4年制大学に進学した生徒が全体で30名前後ほどいたと記憶している。全体に占める割合は大体3%となる。

委員 就職率について説明があったが、商業高校は女子が7、8割を占めている特性がある。かつては事務系の就職が結構あったが、いまは非常に厳しくなっており、その状況をそのまま反映した数字となっている。

副座長 農業高校の卒業者のうち進学等も含めて将来農業に携わる人の比率の回答があったが、残りはどのようなところに就職しているのか。

事務局 農業関係、園芸関係の他に食品、造園、林業なども含めて農業関係の学科を構成している。食品関係の学科では、食品製造の分野に進む者や調理師を目指す者もいる。生活科学関係の学科では社会福祉施設等へ就職することもあり、非常に進路も多様化している。

座長 質問はその位でよいか。ぜひ忌憚のない意見をお願いしたい。

委員 2点話したいことがある。専門高校の議論をする上で、就職先など進路も一つの要素であるが、専門教育の持つ意味についてまず考える必要があると思う。英語や数学などの座学には馴染み難い生徒にとっても、専門学科の学習は社会に近い内容であり、だからこそ非常に教育力が高い側面があると思う。例えば、農業に関する学びを通して勉強の面白さを実感し、進学を選ぶこともあるのではないか。座学中心の学びでは十分力を発揮できなかった生徒も、専門教育を受けることで学ぶことの意味を理解して勉強への意欲を持つといった、専門教育の持っている力について考えなければいけないと思う。労働市場から汎用的な能力を求められているという事務局の説明があったが、汎用的能力をどう育てるかを考えたとき、英数国をやれば汎用的能力が育つとも言いきれない中で、専門教育を通じて汎用的能力を育てるのは非常に効果的な教育の一つだと思う。卒業後は多様な進路に分かれたとしても、専門教育を考えるとときにこの側面を忘れてはいけないというのが1点である。

もう一つ、労働力需要との接点が非常に重要だと思う。先ほど商業系学科の女子の需要が小さくなっているという話があったが、この労働市場の需要の変化に、商業教育が十分対応しているか疑問を感じる部分もある。労働力需要との関係をどうつくっていくかも専門高校のもう一つの大事なポイントだと思う。

座 長 大変重要な意見であった。他にあるか。

委 員 専門高校では実習が中心となる。数学や英語などは中学からの積み重ねが影響するが、専門科目はみんな高校で初めて習う科目である。また、勉強の内容が職業にどう結びついているか分かる学習である。そういう意味で、学ぶことに対して意欲を持つ生徒が非常に増えてくるのが専門高校の大きな特徴だと思う。専門高校に行くと、卒業後の進路を就職に決め職業も選択することになると捉えられがちで、生徒が進路決定を先送りして専門高校に行きたがらないケースも多い訳だが、そういう中でも入ってから伸びていく生徒が専門高校には多い。

もう一つ、色々な専門科目を通して、社会人としての力をつける、勤労観や職業観、ビジネスマナーといった人間づくりもかなり厳しくやっている。これが専門高校の良さでないかと私は思う。また、専門高校の生徒たちは自分が生まれ育ったところに就職する事が多く、専門高校の生徒が地域を支えているといった地域とのつながりもかなりある。

委 員 近隣都県と比較した資料を見ると、埼玉県は、中学を卒業した子たちが高校を選ぶときに、非常に間口が広く、多様な分野が開かれているところが大変よいと思う。普通科だけでなく多方面に渡った進路選択が可能な良いシステムになっている。就職率も高く、特に工業は6割が就職できているし、無業者も少ない。目的意識を持っていなくても、高校に行ってからしっかりと持たせてくれている。頑張ってもらっている表れだと思う。

ビジネスマナーなど具体的な事を教えているという話があって、今もやられているとは思いますが、そういうところをもっと保護者、中学校にPRしていくことが必要だと思う。専門的な学習に加え職業観などのキャリア教育がしっかり行われている、あるいは学び直しができて、学習への意欲を持たせることができるといったところをもっと前面に出していくと、専門高校は受験生や保護者にとってより魅力のある学校になっていくと思う。

委 員 中学生からすると、専門高校がどのようなことをやっているのかよく分からないのではないかと思う。恥ずかしい話であるが、私も産業教育フェアに参加するまで、専門高校がこんなにすごいことをやっているということをよく知らなかった。だから、やっていることを保護者や中学生に伝えて、きちんと進路保証もしていることを打ち出していくことが大切だと思う。専門高校は評価される教育をやっていると思うので、もっとPRしていくべき部分があると思う。

委 員 今、専門学科の魅力が生徒や保護者に伝わっていないという話であったが、それに加えて、私自身がこの資料を見て考えさせられたことがある。それは、社会状況の変化等により専門学科に、今こういう課題があるということ自体が、中学校の教員に伝わっていないということである。この課題を埼玉県の教育全

体として考えれば、中学校など義務教育段階から打つべき手も出てくるように思う。専門高校から中学校でも具体的にこういうことをもっと努力して欲しい、と明確に示されれば、中学校側の意識も変わってくると思う。義務教育と高校教育とで円滑に接続できる策を考えていくべきではないか。特に課題については、中学校ではなかなか周知されていないように感じたので、専門学科の魅力と合わせて、一層積極的に発信していった方がいいと思う。

もう一つ、前回、いわゆるコアにあたる部分の力を付けていった方がいいという話をさせてもらった。普通科では進学率が1つの成果指標であり、専門学科では資格取得率や就職率といった数字的なものが1つの成果と捉えられる傾向があるが、高校全体のコアと併せて、専門学科で学ぶことでこういう力が付く、ということを明確に示す時代ではないか。人間的な部分である社会的自立や市民性といったものに対しても、こう考えているというものが発信されると、中学校の段階で先取りして指導することも出来るのではないかと感じている。

座長 専門高校の魅力や活動内容、成果をもっとアピールした方がよいということと、義務教育と高校教育のつながりをもう少し付けたいかがかという意見があった。他にいかがか。

委員 他の委員からお話があったが、私のいる工業高校でも、ある意味、中学校までの教育を一回リセットして、新たな気持ちで専門教科の実習に取り組むという部分は確かにある。我々の高校には、座学については消極的な子がたくさんいるが、そういう子たちも、中学校と違う新しい勉強をすることで非常にいきいきと実習をやっている。実習の教育的な意味は非常に大きいと思う。

現在、我々の高校では、就職希望者に対して市内の企業を中心に88%の生徒が内定をもらっている。インターンシップをほぼ全員が実習するよう変えてから企業との交流が徐々に深まり、市内の企業の半分くらいに就職するようになってきた。中学時代、勉強が苦手でうちの高校に来た生徒たちが、これだけ企業に就職できるということは非常に大きな意義があると思っている。企業の方が、市内の工業高校の生徒を採用しよう、工業を勉強した子はうちの会社に来なさい、と考えてくださっているのもあるが、我々工業高校の必要性も非常に大きいと考えている。工業高校の人材が必要であると地元の企業に認められている証明だと思うし、地域に貢献していると感じている。

副座長 本当は能力があるのに、勉強が嫌いだから成績が悪いという子どもも結構いるように思う。結局、人間は得手不得手があるので、ある程度、性格というか好きなことを、親や先生が早く見つけてあげることが大切だと思う。そして、見つけてあげた上でどの高校に行けばよいか導いてあげる。そういう点で、中学校の先生がどれくらい専門高校を理解しているかは大事なところだと思う。選択する中である程度自分が好きなものを選んでいく。それが非常に重要だと

思う。

委員 先ほどインターンシップの話があったが、民間企業に勤めていてちょっと考えた方がいいなと感じていたことがあった。中学生がインターンシップに来るが、我々から見ると中学生はまだかわいい時期で、すると企業側としては、ちょっとお茶を飲ませて御馳走して、遊びにおいでといった感覚で受け入れている面がある。これから職業倫理といったところを考えるのであれば、どういう教育を企業にして欲しいのか、何を企業に教えて欲しいのか、中学校と受け入れる企業側が密に連絡を取って明確にしていく必要があるように思う。生徒が単なるお客様にならないようにプランニングし体験させることで、将来の進路を考える一助になるのではないかと感じている。

座長 職業観やモラルといったものは、やはり中学生の頃からきちんと伝えた方がいいという意見であった。

委員 私は専門高校の経験がないため、今日の議論はとても勉強になっている。専門高校で色々な学び直しができたり就職率も非常に高いことを知らなくて、勉強不足であり恥ずかしい話であるが、そういうところが発信はされているのだろうが、なかなか伝わっていないのがもったいないと思った。

同時に、話を聞いて、これからの定時制のあるべき姿の大きなヒントになってくるように思った。本校の定時制にいる生徒たちの能力は決して低くない。座学での学びが苦手な子が多いのは確かだが、作業や体験活動をやるとものすごい能力を発揮する。そういう状況を見ると、うちにいる生徒たちもいままでの過程で何かちょっとしたきっかけがあったら、専門高校に進学できていたかもしれないし、そうしたらその子の人生が大きく変わっていたかもしれないと感じた。専門高校は卒業後の就職率がいいので将来に夢がある。すると色々な我慢もできるだろう。色々勉強になったが、自分の生徒たちのことを思うともったいないなと感じた。

委員 インターンシップは大変重要だと私も思う。ただ生徒を行かせるだけでなく、企業と学校の信頼関係ができた、労働力需要との接点となった、ここが一番大事なポイントである。やはり、地元の企業とどう信頼関係をつくるかが重要であり、企業に高校へ来てもらって高校でやっていることを知ってもらおうと同時に学校も、生徒だけでなく教員も企業に行って、企業の現場をよく知る。専門高校は、そういった環境づくりが本当に必要なのところだと思う。

座長 皆さんの発言は基本的に専門高校の良さや特色を指摘していただき、私も啓発されて勉強になったが、敢えて言うと、基本的に何事も表と裏があって、埼玉県の専門高校は現状のままでいいのか、もっと増やした方がいいのか、あるいは減らすべき領域もあるのではないかと、という視点もあると思う。事務局に聞くが、専門高校に進学した生徒の中で実は普通高校に行きたかった生徒の割

合は調査しているのか。

事務局 そのような調査はしていない。

委員 高校の進学希望状況調査というものがあり、この前、12月15日現在の調査が発表されたが、その前に10月1日現在の調査が出ている。工業高校の状況を見ると、機械科は倍率で言うと大体1倍を超えているが、それ以外の学科では1倍を割って0.6倍や0.4倍というところもある。これは10月1日段階の調査であり中学生の素直な希望の表れだと思うので、元々専門高校を希望する生徒がどれくらいいるかは、この希望調査の数値がある程度は参考になるように思う。12月15日現在の調査では全体的に倍率が上昇していて、1倍に近くなってきている。これは、周りの様子を見ながら普通科から工業高校に移ってきた動きだと思う。

事務局 補足として昨年度の状況を説明すると、昨年10月1日現在の希望状況調査では農業が1.02、工業が1.08、商業が0.94、普通科が1.30である。次の12月15日現在調査では、農業1.13、工業1.13、商業1.05、普通科1.20である。最終的な入試の倍率は農業1.12、工業1.09、商業1.13、普通科1.15という状況であった。

委員 今の数字について、個人的にはもっと専門学科の数字が高くなっていいのではないかと思っている。ただ、面談などで保護者や子どもたちに話をする時に説得力のある説明がなかなかできない。保護者から、子どもの気持ちがまだ固まっていないので、とりあえず普通科に進学してから考えたい、と言われた時にそれ以上推しづらいのが現状である。だから、もっと中学校にこう説明して欲しいというものがあれば、この数字は上がる可能性を十分秘めていると私は思う。

それと、先ほど中学生のインターンシップの話があったが、これは当初、県教育局の事業として始まったと記憶しているが、徐々に市町村教育委員会に移行していき、今では市町村教育委員会や各中学校が主体となり実施する事業になっている。したがって、その取組状況にはかなりの温度差が生じている状況があると思う。明日の埼玉を担う子どもたちに確固とした職業観・労働観を育むためにも、企業とのパイプづくりなど教育局外の他部課との連携を含め、教育局内の高校教育と義務教育とが連携して、インターンシップ事業を見直していくことについても、ぜひ考えていただきたい。

座長 前回の懇話会の議論でも、若者が自分の将来を決める時期を後ろにどんどん延ばしていく傾向が否めないという話があったと思う。今回の会議資料の中の、中学生が将来何になりたいかという資料を見て、今の中学生はこんなに幼いのかと少々驚いたのだが、専門高校を充実させて魅力をアピールするということは、高校生になる時にある程度自分の人生選択をしてもらうことを意味するた

め、それが進路決定の先送りという社会の全体的な傾向とどう関連してくるかの議論があると思う。どのような角度からでも構わないので意見をいただきたい。

委員 進路決定の先送りを全面的に肯定する訳ではないが、高校入試があることを考えると、やはり中学生の段階で専門高校の色々な学科の中から選ぶのは無理ではないかという気がしている。実際に、入試制度では第2希望を認めている例もある。だから、例えば工業高校で一括募集し、1年次に基本的な科目や専門教科を勉強させて、2年次から分けるのも一つの方法だと思う。中学生も工業関係がやりたいと決まっていればよいし、その中で大学進学を希望する生徒がいれば、進学に対応できる教育課程を編成することで、進路保証という面から見ても、専門高校のいい部分が特色としてPRできるのではないかと常々考えている。

委員 専門高校の学科を見ていると、あまりに学科が細分化され過ぎていて、例えば情報通信科や情報メディア科があるが、これがなぜ違う学科に分かれるのか、どう違うのか分かりにくい。やはりこの辺りはもっと分かりやすい基本的なものに即した形に変えて、今の御意見のように2年次から細分化するなどのやり方に変えないと、保護者にとっても分かりにくいのではないかと思う。

委員 前回発言したように、私も学科については、今後はもっと収斂した方がいいという意見を持っている。ただ、これはかつての特色化の取組で、学校独自の特色を出すという中でこうなっていた。同じ地区の中でも、それぞれ違いを出して、生徒が選択して進学するということだったが、現実としてやっていることは多少違って、生徒もその違いが分かっているとは言い難い。学校の自己満足になっているかもしれないので、もっと集約して、会議資料にある何々関係という程度の分け方でいいのではないか。私は、これからは地域性の要素を高めていくべきだと思っていて、もっと地域に根差した地域が必要とする人材を育成するための専門高校になる時ではないかと感じている。

座長 大変良い示唆をいただいたような気がする。この何々関係という分類ですら私には多く感じられる。

委員 地域に根差した人材育成という基盤が大変重要だと思う。その結果として、学校の特徴が出てくるので、科の分け方は学校が自由裁量でできる部分を大きくしていいのではないか。地域の産業界との関連をきちんと持った形で学校が運営されることが重要だと思うので、学科ではっきり決めてしまうよりは、産業界との対話を仕組みの中に入れて、その中で校長の裁量範囲を広げ、産業界のニーズに応じてある程度内容を変えていける柔軟な仕組みがいいのではないかと思う。

委員 私は、専門高校というのは大きく分けて3つのタイプになると考えている。

一つは現在の工業高校、商業高校のような単科型。地域性を考慮し、埼玉県の東西南北にあるのがいいと思う。次に、いまでも総合技術高校があるが、色々な違う分野の学科が一つになっている複合型の専門高校。これからは違った分野の知識も大切だと思っていて、テレビで紹介されていたが、小松菜をつくっている農家の人たちが色々とインターネットで発信したら、和菓子屋の方がそれを目にして小松菜を使ったおはぎをつくったと。ところがそれが青臭くて商品化できない。そうしたら今度は板前さんが出てきて、アドバイスのとおりにしてみたら匂いが消えたと。また、今度は保健師さんが小松菜を使った離乳食はできないかというふうにとんどん発展していった大きな商品化ができたという事例があった。色々な分野の知識が入っているものがこれから成功していく、あるいはイノベーションにつながっていくと思う。そして最後の一つは総合学科的な専門高校という、3つのタイプが主流になるのではないかと私は思う。

副座長 こんなに色々と学科があるのは、社会のニーズに基づいたものなのだろうか。こうなっているのは何か理由があるのだろうか、保護者の要望の中でやっていたらある程度決まってくるようにも思うのだが。普通高校に行った場合、1年目はだいたい一緒に、2年目から文系理系に分かれて、後の2年間勉強する形が多いが、専門高校もそういう形が良いと私は思う。高校教育で最初からあまり専門的に特化するのには私もあまり好きではないが、座学が嫌いでも機械をいじっているのが好き、工具を使ってものをつくるのが好きという子は、やはり適した専門学科へ入れてあげたほうがよいと思う。

ただ、保護者のイメージがいいのか、親が普通科に入れてしまうこともあるだろう。私の会社にも高校を中退した生徒が来たことがあるが、結局そういう子は親が無理に高校に入れている。かっこ悪いから高校に行ってくれと子どもに頼んでいる。私は、好きな事があるならそれに関連した学校を受けなさいと言ってあげたいが、これだけ色々な学科があったら分からないだろう。

毎回申し上げているが、専門高校が普通科より下に見られるのは納得できなくて、専門高校の先生方はそれだけの自負心があっていいし、そうでなければ教育できないと思う。先生には、うちの生徒は専門の勉強が好きだからここに来ているという前向きな形の中で生徒に接してもらいたいし、もしそうでなかったら教育する姿勢が変わってしまう。中学校でも、本当に好きなことは何なのか。周囲に言われたから、かっこいいから、ではいけないよということを三者面談などで丁寧に言っていただきたいと思う。下手をすれば、金が儲かりそうというだけで、情報の分野へ行こうとかもしくはタレントになろうという者もいるだろう。それをすべて否定はしないが、そのためにはどんな勉強をしなければいけないかを考えないといけない。

未だに就職は大手企業中心の状況が続いていて、11月を過ぎないと中小企

業は大学生を採れない。受ける学生も何十社も採用試験を落ちて、ようやく中小企業が選択肢に入ってくる現状がある。就職難と言われているが中小企業は人手不足である。そういった状況を踏まえると、私は地元の企業、それぞれ10人、15人といった規模の会社は、高校生を採用していくべきだと思う。工業、商業、農業ももう少し胸を張ってやってもらいたい。

座長 冒頭にあった、なぜこんなに細分化したのかというお話に関連して、これまで高校ごとに特色を出すという動きがあったのは確かのようにだが、それ以外にも何か要因があるか。産業構造が細分化されたこともあるかもしれないが。

副座長 これだけ細分化すると専門の先生もそれぞれ必要となるのではないかと。

委員 そこまでの特化はしていない。例えば情報技術関係で言えば、情報技術科はプログラムを中心に、情報通信科はインターネットなど通信関係も含めて勉強するとか、情報電子科はCGを取り入れて学習するなど工夫している。要は何か特色を持ちたいということで、名前も含めてそれぞれ違いがあるとPRをしてきた。ただ、最終的には十分浸透しなかったということだと思う。

座長 一つ一つの学科の違いと魅力が、保護者や中学生に浸透しているとは言えない現状があるのは確認できたと思う。

副座長 企業の立場としては、専門高校の情報関係の学科の卒業者を雇えるかという点で難しく、大学の工学部あるいは大学院で勉強した知識が必要となっているのが現実である。だから、昔でいえば土木や建築、電気、機械など、最近なら化学も加わるかもしれないが、そういった太い何本かの柱にして教育した方が実際に即した勉強ができると思う。専門分野の中であまり特化してしまうと、結局は卒業しても就職できないという挫折感ばかり味わってしまうのではないかと。大学院生だってなかなか自分の希望するところに行けないのが現状である。

座長 細分化の話題から、またちょっと違った問題提起をしていただいた。他にいかがか。

委員 専門高校と言っても7割は普通科目であり、残りの3割で専門科目をやっている。それで実社会に即対応できる教育なんてとてもできる訳がないので、汎用的かつ基本的な専門教育をやっている。結果、例えば大学進学や将来の職業会計人などの方向性へつながるということでやっている。ただ、私の学校でも8割近くの生徒が進学するが、大学に入ることが目的ではなく、専門科目をさらに継続して勉強するという目的で行くことが大切だと考えている。だから、大学で、商業高校でやった専門科目をもう一回勉強するのはとてもナンセンスだし、専門の力をさらに継続して育ててくれる大学を選びなさいと奨めている。

座長 乱暴かもしれないが、先ほど数値を色々と聞いた限りでは農業高校には色々と厳しい状況があるように思う。ひょっとすると農業高校には、他の学科とは違う要因もあるのかもしれないと思ったのだがどうか。

委員 私は教育機関に勤めていたことがあるが、そこは農業高校の生徒の実習の受入先でもあった。実習では牛の世話をしたりするが、みんな素直に一生懸命良い顔をしてやっていた。どの学校の生徒も挨拶もよくできていて本当に立派であった。

農業は、実習を通じて動物や野菜を育てるといった喜びがある学科だと思う。別に将来、農業に就かなくても食品関係など様々な分野があるから、会社などで役立てていければよいし、こういうこともできます、こんなところへ就職していますというPRをいろいろと深く考えてやっていけば、私は、農業高校はこれからも進歩してやっていけると思う。

委員 農業高校の生徒の卒業時の進路先が、無業者である者の割合が10.8%というのは非常に重いと思う。商業も全国的には無業者の数値が高いが埼玉は低く、これは多分地域との関係を上手くつくった商業高校が多いのかなと思う。農業の無業者の多さというのは、やはり、これは需要との間の齟齬が大きいのだと思う。先々は需要もまた変わってくるかもしれないが、これはちょっと考えなければいけないと思う。

副座長 やはり受け皿がないことに尽きると思う。産業界の人間としては色々思うところがあって、農業高校を出てもほとんど就農できないのはなぜかと考えると、やはり農業には閉鎖的なところがあって、市場を拡大して誰でもできる方向にいてくればと思うのだが、そうになっていないことが大きいと思う。せっかく農業高校に進もうとしても、受け皿がなくては厳しい。3年間勉強して結局他の分野へ行くのであれば行かない方がいいになってしまう。農業高校を出たのであれば、然るべきところへやはり行ってもらいたい。

座長 先ほど聞いた進路希望調査では、農業関係の学科の志望者は商業や工業と遜色がない数字だったように思えたが、どうか。

事務局 女子生徒の人気の高い食品化学や生活科学の学科が、数字を押し上げている面がある。

副座長 それらの学科は農業というよりも違う分野に属するように思う。

委員 埼玉県喫緊の課題として学力向上がある。学力向上のためには、言うまでもなく日々の授業を充実させることが大切である。わかる・できる・出番がある授業を展開し、教科そのもののおもしろさをいかに子どもたちに伝えるか、についての真剣な議論が各学校などで薄れている気がしてならない。中学校段階で「できるけどおもしろくない」という生徒は高校での伸びがあまり期待できないのではないだろうか。「教科内容がおもしろいから勉強する」という内発的な学習意欲を高める努力がもっとも必要である。

その一方で、「将来この職業に就きたいから勉強する」といった外発的な学習意欲も大切にしたいと思う。夢や志があるのとないのでは、学習意欲も当然違

ってくるはずである。進路選択の先延ばしについて何度か話題になっているが、私はできるだけ夢や志は早いうちから持たせるべきだと思うし、自分の将来のために、いま何ができるか、何をやらなければならないかを逆向きに考えさせていくことも重要だと思っている。そういった夢や志を考えさせるためには、先ほど来、言っているように中高の連携が欠かせないと思う。農業の魅力やおもしろさ、そして農業高校に行くところという力が付いてこういう進路があるという情報を中学校教員がなかなか話せない現状をてこ入れしていくことが、結果的に小中学校そして高校の児童生徒の学力向上に密接に関連付いていくのではないかと感じている。そういう部分での中高連携をもっと進める必要があると思う。

話は変わるが、いま企業では、顧客満足いわゆるC. S. は、従業員満足いわゆるE. S. からと言われることがあると聞いている。そのような視点から考えると、専門高校の先生方がどのくらいモチベーションや誇りをもって教育にあたっているのかが気になっている。特に基礎的な力を付けたり学校の組織力を高める観点から、国語や数学といった専門教科以外の普通教科の先生方のモチベーションが重要な鍵を握っていると思う。専門高校で普通教科を受け持っている先生方のモチベーションは果してどうなのか。専門教科の先生方と差があるのか。最後は質問を兼ねて発言させていただいた。

事務局 専門学科と普通科の先生の違いがあるとは思いますが、学校の中でしっかりと風通し良くコミュニケーションをとることが重要と感じている。人事面では、経験や適性、本人の希望を考慮し、専門高校や普通科高校にそれぞれ配置しているところである。

委員 やはり、工業高校なら工業学科の先生が中心になってやるものだと、専門の先生も普通科目の先生も思っているところはある。ただ、色々なタイプの高校があってそれぞれに中心となる教科があることは教員も分かっており、人事異動の中で、適宜、学校を移っていくので特に問題はないと思う。

先ほど来、話の出ている中高の連携であるが、工業高校について中学校の先生がよく御存知でないことは本当に肌で感じている。高校選択で、中学校の先生が熱心に勧めてくれたから、ということはほとんどなくて、あの高校の普通科に行きたいけど合格するのは難しそうだから、と入試の倍率などを見て工業高校が選択されているのが実情だろうと思う。私たちにとってそれは非常に本意ではないため、学校でやっていることをとにかく中学校に知らせたいと考えていて、うちの学校では市内の中学校の技術家庭科の先生をお招きして、一緒に実習をする取組を行っている。もう一つ、発電コンテストという、中学校の技術家庭科の先生や科学部の顧問の先生にお知らせして、子どもたちがつくった発電機を本校に持ち寄ってもらって、電圧の出具合で優勝を決めるイベント

も始めた。徐々にだが、工業高校ではこんなことをやっているという理解が広がっているように感じていて、多少なりとも効果があるのかなと思う。とにかく中学校との交流を一つでも二つでも増やし、積み重ねていくことが必要だと思っている。学校説明会をやれば済むという話ではなく、実際に中学校の先生に高校へ足を運んでもらうことがすごく大切だと思う。

学校の中身や魅力で選んでもらえていない現状はあるが、我々の高校は工業高校として非常にいいものを持っていると自負している。教育内容もいいし、進路もいい。もっといい位置にいていいのではないかと正直思っている。現在の社会状況の中では、学力の非常に低い生徒も、高校進学を希望して、どこかの高校に行くことになるが、そういった生徒の受け皿は今後どうするのかを考えなければいけないと思う。そういった生徒が今は専門高校に来ているけれど、いつまでもそのままよいのだろうかと感じている。

副座長 先ほどのモチベーションの話であるが、製造業の会社でも、製造、営業、経理と色々いる中で、製造に携わっている人間だけが威張っているかということそんなことはない。企業はそれでは成り立たない。十人いれば十人がそれなりの力を発揮してもらわないといけない。普通教科の先生は、例えば学校の総務的なことにも力を出してもらったり、技術的な人はそこに特化するようなそれぞれの役割ができてくれば、全員のモチベーションが上がるのではないかと。

委員 違う角度から一つ話をしたい。資料で社会状況の変化に触れているが、やはり高校生が即戦力になることはあり得ないので、育てることが大前提となる。やはり、高校生は、育てるべき人材として採ってくれる企業に就職させなければいけないし、即戦力で使い潰すようなところに就職させてはいけない。学校から見て、この企業なら安心して送り出せるという企業と学校の信頼関係をどう作っていくかがこれから本当に大事になってくる。これは一つの学校の努力でできることを超えているため、ぜひ県の政策として産業労働部と連携し、高校生を育成する企業をバックアップして欲しい。同時に、企業も高校に行って教える機会を設けるなど企業の教育力も提供してもらおう。専門教育はお金が掛かる教育である。普通科と違って教材や道具がいるし、場所も必要になる。こういった面でも企業に少し助けてもらって、学校応援企業グループをつくるというような、学校だけではできない高校生を育てる企業を応援する仕掛けを、県で音頭を取ってやってくれないかと思う。

座長 今日は色々といいアイデアが出てきた。私も、教育局と産業労働部が連携して若い労働力を育てる取組はよいと思う。義務教育と高等学校がややもすると途切れてしまうのをつなげていけないかという意見も同感であるし、産業教育フェアについても、色々な専門高校の生徒たちが本当にいい作品を出しており、もっと広げると良いのではないかと思った。意見がまだまだ尽きないところだ

が、次回も振り返って議論する時間が多少あると思う。また、思いついたことがあれば次回会議にて発言して欲しい。

最後に一つ、普通科と専門学科の比率を示した資料を見ると、南関東の都県の中で埼玉県普通科比率が一番低い。千葉県と比較すると随分違いがあって、これは偶然の誤差とは思えない。それぞれの県の教育政策が反映されているように思うが、この辺をどう見るのかがひょっとすると我々の宿題として残っているかもしれない。それでは本日も活発な議論にお礼申し上げます。

(以上)